時評

佐藤洋一郎　総合地球環境学研究所副所長・教授

スーダンの雑穀農業

ナイルが生んだ豊かな地

アフリカの雑穀農業の調査でスーダンに行ってきた。アフリカ旅行は初めてで、ドバイからの飛行機の窓からナイルの姿を認めたときの感激はひとしおだった。実はナイル河畔からこの国の西部にかけての一帯は、ソルガムこと高粱（こうりゃん）のふるさとといわれる。高粱といえば今では世界各地で、家畜の餌として、また中国などでは酒の原料としても用いられるが、もとはアフリカ原産である。

スーダンは、サハラ砂漠を中心とする大乾燥地帯の南側のサバンナ地帯にある。降水量は、北にゆくほど少なく、南に行くほど多くなる。東西に伸びるサバンナの帯状の回廊を、人びとは太古から、東へ西へと渡り歩いていたようだ。イスラム以後は大勢の人びとがこの回廊を通ってメッカへと向かい、また故郷へ戻っていった。

スーダンというと何となく乾燥がちの不毛な大地を想像していたが、私が訪れた東部の町カッサラの周辺では、ソルガムのほか、ゴマやラッカセイなどの畑が見渡す限り広がっていた。あたりは、今も昔もとても豊かな土地であるようだ。

人びとの食についても、いろいろ面白いことを見聞きした。とくに発酵技術の高さには驚いた。ソルガムのパンのなかには、生地を発酵させてから作るものもある。ソルガムの発酵飲料はまるで甘酒のソルガム版とでもいうべきものである。

チーズもじつによく食べられる。ナイルの河岸には、魚醤のような食品もあるという。一般的にはメソポタミアとされるが、案外その技術と文化はナイル流域に広くみられたものかもしれない。

実際ナイルを通って人びとは南北に動いていたらしい。古代エジプトとエチオピア二つの文明は、ナイルを介してつながっていた。さらに古く、アフリカ東部で生まれたわれわれ現生人類の祖先たちは、10万年ほど前、紅海を渡ってアラビア半島に達したといわれている。人びとは青ナイルを下り、まさにここを通って紅海に達したのであろう。

さて渡航直前にスーダンでは首都ハルツームで反米デモが起きたと報じられた。私も渡航をためらったが、情報を集めた上いざここに来てみて、街の平穏さにずいぶん驚いた。人びとは勤勉で、しかもとても穏やかだ。どこの町でも、不穏な気配は感じられなかった。「百聞は一見にしかず」。私がアフリカを何も知らなかったことを改めて思い知った。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「コシヒカリより美味い米」（朝日新書）など。